

令和 6 年 5 月 15 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00001

研究課題名(和文) 『信の哲学』英語版作成を介しての負の知的遺産を克服するパウロの言語と心身の哲学

研究課題名(英文) Paul's philosophy of language and mind overcoming the negative intellectual legacy through making english version of 'Philosophy of Faithfulness'

研究代表者

千葉 恵 (CHIBA, KEI)

北海道大学・文学研究院・名誉教授

研究者番号：30227326

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：「信の哲学」の英語版作成の所期の目標はほぼ達成できた。パウロ神学の基礎にある彼の方法論であるロゴス(理)とエルゴン(その理の今・この働き)の相補性を展開した。それはアリストテレス哲学の方法論でもあり、その研究成果を「アリストテレスの様相存在論の考察」としてイェール大学David Charles教授の献呈論文集に掲載した(2024)。なお、研究代表者のパウロ「ローマ書」の神学的に中心箇所である「ローマ書」3章22節の誤訳の訂正に賛同した研究者たちとシカゴからHP作成プロの手助けを得てThe Faithfulness Projectを立ち上げ、基礎論文三つと対話録画三本をHPにアップできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

パウロ神学の中心的な箇所(「ローマ書」3:21-26とりわけ3:22)が誤訳されており、これが正されるとき歴史上宗教改革等大きな影響を与えた「ローマ書」を整合的なものとして読みうることを示した。それにより、究極的にはインクの染みの変更が血の染みを乾かすことができるかの挑戦となる。

研究成果の概要(英文)：The desired goal of producing an English version of the Philosophy of Faithfulness was largely achieved. I developed the complementarity of Logos (reason) and ergon (the here-and-now workings of that reason), which is his methodology at the foundation of Pauline theology. It is also the methodology of Aristotle's philosophy, and the results of his research were published as "Reflections on Aristotle's Modal Ontology" in the collection of essays dedicated to Professor David Charles of Yale University (OUP 2024). In addition, with the help of researchers who agreed to correct a mistranslation of Romans 3:22 ever since of 2nd century CE, the theologically central passage in Paul's "Romans," and a professional website creator from Chicago, we launched The Faithfulness Project, and were able to upload three basic papers and three dialogue recordings to the website.<https://thefaithfulnessproject.org/>

研究分野：Philosophy

キーワード：faithfulness righteousness separation God logos ergon law semantics

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

千葉恵 科研基盤研究C『『信の哲学』の英語版作成を介しての負の知的遺産を克服するパウロの言語と心身の哲学』(2018-2024)

### 1. 研究開始当初の背景

2018年にライフワーク『信の哲学 使徒パウロはどこまで共約可能か』上巻836頁、下巻491頁+29頁(横書き)(北海道大学出版会 2018)を科研研究成果公開促進費(17HP5015)の助成をえて上梓した。ヨーロッパの二千年の哲学、神学研究の蓄積へのチャレンジであっただけに、英語版作成は不可欠な状況であった。

### 2. 研究の目的

人類が最も読んできた書物「聖書」の神学的に中心的な箇所パウロ「ローマ書」3章21節から26節の誤訳を言語哲学の方法論のもとに明らかにしたという自覚のもとに、これにより欧米の神学、哲学研究の伝統に挑戦する。パウロの神学的に最も重要な箇所であるローマ人への手紙3章22節の誤訳を正すことは、ローマ人への手紙全体を首尾一貫して読むことにつながる。私の挑戦は究極的にはインクの染みの形が修正されることによって、人間の流血の染みが乾くのか、というものである。

### 3. 研究の方法

信をめぐる問題は基本的には言語哲学における意味論と心の哲学における心身論の構築のもとにすでに解けているという理解のもとに、その英語版作成を通じて議論を改善しつつ、また新たな視点からの論文を執筆するという方法をとった。

私は使徒パウロの福音宣教がどれだけ哲学的吟味に耐えうる神学説を展開しているのかを探索すべく、アリストテレス哲学を一つの共約性規準(共通尺度)として立て、「ローマ書」の意味論的および心身論的分析に従事した。ひとは信じる者もそうでない者も誰であれ同じ言語(翻訳関係含む)と心身を持っているという道理ある前提のもとに、矛盾律を最も基礎的な共約性規準に据え、ひとつひとつ共通尺度の適用の拡張可能性を吟味した。パウロ書簡で語られる「神」は言語使用者であり何らかの意味論のもとに言語行為を遂行し、その認識や判断がパウロにより報告されているという、道理があり、共約されうる仮説を書簡解釈の基礎に立てる。「神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡した」というパウロの報告において、「恥ずべき」は引き渡された当人ではなく、まず神によりその語において理解される神の前の現実が指示されている。

パウロは福音の伝達において、この神の前とひとの前の次元の分節と総合を「ロゴスとエルゴン(理論と実践)」により遂行する。彼はロゴスとエルゴンの相補性のなかで「或る部分大胆に書いた」と自らローマ書結論部で記すが、彼がこの書簡の或る部分(信仰義認論(1-4章)と選びの教説(9-11章))においては、「霊と(神の)力能の論証」を試みることなく、聖霊の働き(エルゴン)を括弧にいれ、聖霊に対する言及なしに「知者たち」に理性のみにて理解されるよう「知恵の説得」を大胆に試みている。

アテネのアゴラで「毎日、哲学者たち」と議論を重ねたパウロは自らの神学的主張の背後に、自ら信の哲学者として哲学的分析を許容する仕方でも宣教に従事していたことを信の哲学は抽出した。彼は「イエス・キリストの信を媒介にして」(3:22)神の義が新たに啓示され

知らしめられたと神の前の出来事を報告するが、神は自らひとに対し信に基き義であるというこの福音を中心にそれぞれ無矛盾で整合的な言語網を五層展開している。異邦人伝道に従事するパウロが「汝らの肉の弱さの故にわれ人間的なことを語る」その人間中心的な言語網をも展開するなかで、神中心的な神の前の自己完結的な言語網とひとの前の相対的自律性の言語網が析出される。彼はそれらを媒介するものとして聖霊の働きを位置づける。パウロは神の前における義人とは「イエスの信に基づく[と神に看做される]者」そして罪人とは「業の[モーセ]律法に基づく[と神に看做される]者」のことであると一般的に啓示により知らされていると主張する。個々人には二つの啓示の媒介ほどには誰にも明晰に知らされていないため、自らの信が神にイエスの信に基づくことと看做されていると信じることは実質的なこととなる。彼は「汝が汝自身の側で持つ信を神の前で持て」と命令形により、自律した行為主体に懐疑や不信仰を乗り越えるよう励ます。無矛盾な諸言語網を展開しているという意味において、パウロは「信以前の理解」のモットーのもとに展開する信の哲学の先駆者でもあった。パウロは、神の前の義人と看做されるべく、ひとがその備えとしてなしうる人間の本来的な生、永遠の生命を構成するものは、心魂の根底に信が生起し、信に基づき希望のうちに愛の道を歩む限りにおいて実現されることを最終的に誰にも共約されうるものとして論じる。

意味論的分析の一つの成果として、本書は人類に最も多く読まれた書物の神学的主張の中心箇所(Rom.3:22)における「(神の義とその啓示の媒介であるイエス・キリストの信に)分離がない」を、ヒエロニムス以来「(信じる者のあいだに)区別がない」と一様に誤訳されてきたと主張する。この誤訳がその後のヨーロッパにおける神学そして哲学の諸論争とさらには政治的な争いの歴史の一因となったと論じ、和解案を展開する。

#### 4. 研究成果

『信の哲学 使徒パウロはどこまで共約可能か』を上梓して6年が過ぎた。その後いくつかの書評や特集をいただいた。今年2月にシカゴの友人らと動画編集のプロの助けを借りてHPの開設により The Faithfulness Project を立ち上げた。

<https://thefaithfulnessproject.org/> これまでの以下の英語論文 (A Semantic Analysis of Paul's Epistle to the Romans: Ergon and Logos, Uchimura Kanzo on Justification by Faith in His Study of Romans: A Semantic Analysis of Romans 3:19-31) そして新しい Proposals and Theses をオンライン上に上梓した

( <https://thefaithfulnessproject.org/scripture/scripture-article-five> )

さらに You Tube に Proposals and Theses に沿った幾つかの対話を掲載している。これにより一応所期の目的は達成したと考えている。

<https://thefaithfulnessproject.org/scripture/scripture-article-one>

<https://thefaithfulnessproject.org/scripture/scripture-article-two>

<https://thefaithfulnessproject.org/scripture/scripture-article-six>

<https://thefaithfulnessproject.org/scripture/scripture-article-seven>

<https://thefaithfulnessproject.org/scripture/scripture-article-eleven>

『信の哲学』は言語哲学また心の哲学によるパウロ「ローマ書」の分析とパウロ以後の「ローマ書」解釈の神学および哲学の歴史に対する応答として構築された。これはいかなる聖書学的、神学的解釈もその言語的な制約(五つの言語層)の枠のなかで遂行されねばならない

という基礎的な哲学研究であった。

北大定年退職後のこの4年間は、『信の哲学』から派生するその応用問題の解明に従事した。例えば福音と律法の関係、贖罪論、死生観、国家と平和そして山上の説教に取り組んだ。

「『信の哲学』における半世紀の間と解 福音と律法」(『哲学』北大哲学会 2020)、「身代わりの愛の力能」(「方舟」61号(登戸学寮 2021 <http://hdl.handle.net/2115/80314>))、「聖書の死生観 旧約における待望の蓄積から新約の時の満ち足りへ」『死生学年報 2022』(東洋英和女学院大学死生学研究所 2022 <https://toyoeiwa.repo.nii.ac.jp/records/1726>)、「平和を造る二種類の正義 南原繁『国家と宗教』を手掛かりに」(「方舟」63号 2023 <http://hdl.handle.net/2115/87786>)。

登戸学寮においてこの4年間基本的に山上の説教を日曜に講義したが、それをもとに初めて福音書について本格的に論じた(「山上の説教における福音と倫理」(「方舟」64号 2024 <http://hdl.handle.net/2115/91150>))。これにより聖書学の一つの難問であったイエスとパウロの関係について明確な見解を持つにいった。

山上の説教におけるイエスの語りの層が四層あり、その根源である福音は宣教する者(イエス)とされる者が同一である自己言及に特徴がある。第二の語りの層は自然事象である光、水、野の百合空の鳥等を媒介にした天と地の連続性の語りである。第三は「悪者」の故に不連続のもとにある聴衆に譬え話による地から天への架橋の語りである。そして第四に「木は実によって知られる」、「君が量る量りにより量り返される」、「宝のある所そこに心がある」、「カエサルのはカエサルに、神のものは神に」等自然法則や倫理的原則を引き出しうる語りである。福音は信じることによってしか受容できないが、他の三つの語りも福音に秩序づけられていると論じた。預言者的な迫害の生の八福においてまたモーセ律法の純化において、山上の説教が展開されるが、信の従順の生を貫いたナザレのイエスが双方をリアルタイムに満たしつつある現場で、憐みがあふれ出し新しい生命の福音を彼の言葉と行いにおいて歴史に刻んでいった。それが福音書記者により歴史的進行過程として報告されている。信の従順を貫き復活を与えられたことを前提に形成したパウロ神学とは矛盾しない。律法の伝統のなかに自己規制しつつもこの古い革袋を内側から迸り破るイエスの生命は新しい革袋である信の律法に注がれると論じた。そこで倫理学を構成する三つの特徴(態勢論、理論と実践の相即性、幸福と祝福)をイエスは満たしている。木は実により知られる善悪因果応報説は信じる者にも信じない者にも妥当する一つの倫理学説として自律的なものとして展開されるが、信に基づく正義の「無償の贈り物」である福音により秩序づけられること、また山上の説教を何よりも喜びの音信である福音として読みうることにより、パウロの神学と両立すると論じた。イエスの説教が善き音信であるからこそ、群衆は喜んでついていったのであろう。

なお、『信の哲学』第二章のアリストテレス倫理学について展開があった。「アリストテレスの実在論的倫理学 ログスに即して生きること」『モラリア』第29号(東北大学倫理学研究会 2022)、「アリストテレスの神学的倫理学 「神の贈りもの」と「徳の褒美」の祝福による媒介」『ギリシャ哲学論集』XX(ギリシャ哲学セミナー2024)。自然上の「快さ」を伴う神による「祝福」が今・ここで働き(エルゴン)においてあるとき、どんな境遇にあってもその喜びが「幸福(ログス(定義) = 徳に即した或る種の実働)」の規定を満たすと論じた。幸福とは「或る種」即ち喜びを伴う実働であったのであった。

また D.Charles 先生への献呈論文集がこの春刊行された。Reflections on Aristotle's Modal Ontology *Aristotelian Metaphysic Essays in Honour of David Charles* pp.297-318 (Oxford

University Press 2024)。これは信の哲学の方法論であるロゴス（「力能」と「完成」の組）とエルゴン（「力能」と「実働」の組）の相補性の基礎理論となるものである。13世紀にトマス・アクィナスが使用したモルベケのラテン訳以来誤訳されており、高校の教科書にも掲載される現実態・可能態の様相存在区分の間違いを代案とともに指摘している。パウロにおける信と共にアリストテレスにおける存在解釈の中心的な語彙の誤解が解かれることを願っている。この論文は2020年に編集者に送付したが、15人の執筆者がいることとコロナ渦により大幅に刊行が遅れた。しかし、ようやく上梓され、この報告書において報告できることはありがたいことであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 29
2. 論文標題 アリストテレスの倫理的実在論 ロゴスに自ら即して生きること	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 MORALIA	6. 最初と最後の頁 85-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 63
2. 論文標題 平和を造る二種類の正義 南原繁『国家と宗教』を手掛かりに	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 方舟	6. 最初と最後の頁 173-241
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 28
2. 論文標題 アリストテレスの意味論 - 既知及び未知なものごとを包括する -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MORALIA	6. 最初と最後の頁 3-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 XVIII
2. 論文標題 聖書の死生観 旧約における待望の蓄積から新約の時の満ち足りへ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 死生学年報	6. 最初と最後の頁 83-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 61
2. 論文標題 身代りの愛の力能	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 方舟	6. 最初と最後の頁 90-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 54
2. 論文標題 『信の哲学』に至る半世紀の問いと解 福音と律法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『哲学』北海道大学	6. 最初と最後の頁 103-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kei Chiba	4. 巻 Vol.15
2. 論文標題 Aristotle's Logike (Art of formal argument):Theoretical foundation of Dialectic and Ontology	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of the Faculty of Humanities and Human Sciences	6. 最初と最後の頁 9-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 159
2. 論文標題 『信の哲学』の方法についてー佐々木啓氏の書評への応答ー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道大学文学研究院紀要	6. 最初と最後の頁 1-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 64
2. 論文標題 アリストテレスの様相存在論－「完成(entelecheia)」によるロゴスとエルゴンの媒介	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 哲学年報(北海道哲学会)	6. 最初と最後の頁 59-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 28
2. 論文標題 アリストテレスの意味論 既知及び未知なものを包括する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MORALIA	6. 最初と最後の頁 3-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 1
2. 論文標題 聖書の死生観	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 死生学年報	6. 最初と最後の頁 83-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 29
2. 論文標題 アリストテレスの倫理的実在論 ロゴス自らに即して生きること	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 MORALIA	6. 最初と最後の頁 85-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 千葉恵	4. 巻 63
2. 論文標題 平和をつくる二種類の正義 南原繁『国家と宗教』を手掛かりに	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 方舟	6. 最初と最後の頁 173-241
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 64
2. 論文標題 山上の説教における福音と倫理	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 方舟	6. 最初と最後の頁 198-287
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千葉恵	4. 巻 XX
2. 論文標題 アリストテレスの神学的倫理学 「神の贈りもの」と「徳の褒美」の祝福による架橋	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ギリシヤ哲学セミナー論集	6. 最初と最後の頁 63-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kei Chiba	4. 巻 1
2. 論文標題 Reflections on Aristotle's Modal Ontology	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Aristotelian Metaphysics Essays in Honour of David Charles	6. 最初と最後の頁 297-318
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 千葉恵
2. 発表標題 アリストテレスにおける運動の定義
3. 学会等名 「プラトン、アリストテレスにおける時空と運動および論証知」(2018.6.30北海道大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千葉恵
2. 発表標題 信の哲学－啓示神学と自然神学の媒介
3. 学会等名 北海道大学哲学および北海道哲学会共催(7.15北海道大学) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千葉恵
2. 発表標題 パウロの選びの教説における信念と行為の比例性テーゼ
3. 学会等名 北海道基督教学会(7.16北星学園大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千葉恵
2. 発表標題 アンセルムスの神の存在論証
3. 学会等名 中世哲学会第68回大会(11.11、聖心女子大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 千葉恵
2. 発表標題 アリストテレスはナザレのイエスを預言した エウダイモンとマカリオス
3. 学会等名 第26回ギリシャ哲学セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 千葉恵
2. 発表標題 山上の説教の倫理学 跳ね返りと互惠性の法則をめぐって
3. 学会等名 慶應MIPS2023
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 千葉恵(共著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 LITHON	5. 総ページ数 239
3. 書名 死生学年報	

1. 著者名 Kei Chiba et alter	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 400
3. 書名 Aristotelian Metaphysics Essays in Honour of David Charles	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://www2.sal.tohoku.ac.jp/philosophy/moralia.html  
https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/statistics/statslist.php?statsurl=AMDQgvkW3hGqXts  
https://www.noboritodorm.net/  
http://hdl.handle.net/2115/80314  
http://greek-philosophy.org/ja/files/2024/03/05%E8%AB%96%E9%9B%86-2024-  
%E5%8D%83%E8%91%89%E5%85%88%E7%94%9F%EF%BC%88%E6%9C%80%E7%B5%82%E7%A8%BF%EF%BC%89.pdf

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Aristotle on his Modal Ontology Yale University	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------